

Francesco Libetta Piano Recital 彼自身によるプログラム・ノート

10月29日のフランチェスコ・リベッタのピアノ・リサイタルは「イタリア音楽の変遷」とでも称すべき独特な内容です。そこで本人にこのプログラムに関する解説を書いてもらいました。原文のままでは日本人には分かりづらいところがあり、本人に追加でヒアリングしたことも盛り込まれています。

なおチラシに掲載されていないジェズアルドの“ガリアルダ”が2曲目に演奏されます。

イタリアにおけるピアノ音楽の歴史は独特です。18世紀末期から20世紀初期のヨーロッパにおいて、ピアノという楽器はコンサート・ホールやサロンの花形だったといえるでしょう。けれども、ルネサンス後期にフィレンツェで生まれたオペラがイタリアで発展を遂げ、ヨーロッパを席卷する一方で、ピアノはイタリアの音楽の表舞台から傍流へと押しやられてしまいます。絶えず戦争の波を被り、他国の支配のもとで小国が分立せざるを得なかったイタリアの社会は、経済の面でも教育の面でも統制がとれておらず、芸術家たちの旺盛な創作活動を支えていくのは困難だったので、イタリアの芸術家たちは聴衆の喜ぶ作品、つまり器楽曲ではなくオペラや声楽曲を主に作曲したからです。それらはイタリアの国内外で人気を博し、当時のヨーロッパの作曲家たちに多大な影響を与えました。

しかしながら、レオナルド・レーオをはじめとする作曲家たちの素晴らしい作品は、その後すっかり忘れ去られ、今日では譜面を手に入れることすら難しくなっているのは残念なことです。一大オペラブームが去った後の20世紀の作曲家、レスピーギやダヴァロスについても同様です。本日のプログラムでは、忘却の彼方に葬られるには惜しい作品に光をあてております。4世紀近くにわたるイタリア音楽の変遷をお楽しみください。

1曲目は“テアトロ・ムジカーレ（喜歌劇）”へのオマージュで、内容は“アンチ・セレナータ”つまり恋人たちの痴話喧嘩です。作曲家レオナルド・レーオ（1694-1744）の作品の印象深い優美さは、今はなきシチリア王国の首都だったナポリの典型的世界を感じさせます。レーオ自身はサレント地方（長靴型のイタリア半島のちょうど踵の部分辺り）のサン・ヴィート・ノルマンニという片田舎で生まれました。私のピアノ版編曲では、喜歌劇『*Amor vuol sofferenza*（愛は苦しみを望む）』第2幕フィナーレの2曲のアリアから1つのシーンが構成されています。『*Lo frate 'nnamorato*（恋する修道士）』を手がけたジェンナーロ・アントニオ・フェデリーコによるレチタティーヴォ付きのアリアのテキストは、罵り合いそのものです。「誰かがあなたを包丁で切りつけりゃいい！」 「誰かがおまえの頭を打ち抜きゃいいんだ！」 「このギターで頭をぶちわってほしいか？」 「顔をこのタンバリンでひっぱたいしてほしいの？」・・・こんな調子で恋人たち、すなわち馬車ひきのモスカ（イタリア語で“蠅”を意味する）とナポリの下町ポルティチでパンを売るヴァスタレッラ（“でか顔女”）が、ナポリ弁でこんな調子やり合うのです。

“*La Canzone a dispetto*（からかいの歌）”（というより、罵り合いの歌）では、まずモスカがマンドリンの一種であるカラショーネの伴奏で、次にヴァスタレッラがタンバリンとともに歌います。レーオの音楽スタイルは“オペラ・セーリオ”の厳格さはなく、ナポリ楽派らしい明るさに彩られています。また彼が実際には喜歌劇作曲家としてではなく、教会音楽作曲家として広く知られていたことも忘れてはならないでしょう。彼の書いた讚美歌はイタリア統一の初期まで非常に愛されており、ナポリで感銘を受けたワーグナーは、レーオの讚美歌を楽劇『パルジファル』の合唱部分に取り入れています。

ヴェノーザの王子、カルロ・ジェズアルド伯爵(1566-1613)が作曲した”ガリアルダ”でも、ナポリが舞台です。彼の作品を愛したストラヴィンスキーは、いくつかのマドリガルをオーケストラ用に編曲しています。ジェズアルド独特のスタイルは、彼自身の数奇な人生とも関わりがあるかもしれませんが。彼は名誉のために妻マリア・ダヴァロスを部下に命じて殺しましたが、そのことが彼の心に深い傷を負わせたことは少なくとも間違いないでしょう。ジェズアルドはルネッサンス音楽の最も実験的かつ表現主義的な作曲家でした。有名な音楽家たちからの批判を恐れず、とりわけ大胆な半音階技法を用いたことは今もよく知られています。

ミケランジェロ・ロッシ(1601c.-1656)の”トッカータ”は神秘主義的表現と深く結びついています。トッカータ第7番の即興性の強い自由な構成は、ジローラモ・フレスコバルディの影響を受けていると思われます。この時代、デカルトの思想がまだ普及していないにもかかわらず、ロッシの用いた数学的表現はいかに先進的かつ高貴であったことでしょうか。曲の最終部の思いがけない半音階のスパイラルの連続は、ジェズアルドの手法を彷彿とさせます。

これに続く短い3つの曲は、かつてはとても有名であり、器乐的ピアノのスタイルが18世紀に徐々に形成されてきたことをよくあらわしています。

マルティーニ神父(1706-1784)はボローニャ出身の優秀な教師で、モーツァルトに対位法を教えたこと

でも知られています。彼のソナタのフィナーレ(”ガヴォット”)はガヴォット風のテンポが指示されてはいますが、特に踊りのために書かれた音楽ではなく、非常に洗練された芸術作品といえるでしょう。

パラディージ(1707-1791)の”トッカータ”における、本来の対位法のルールから解放されて自由に和声と音型が紡ぎだされていく様式は、ピアニスティックで華やかなものとなっています。

トゥリーニ(1745-1829)の”プレスト”も同様で、ここではよりドラマティックでピアニスティックな表現が感じられます。

そして、ムツィオ・クレメンティ(1752-1832)によって、完成された形式のピアノ曲が生まれます。本日演奏する3楽章形式の短い”ピアノ・ソナタ”では、クレメンティらしいダイナミックで華やかな表現が効果的に使われています。その超絶技巧の天才的な処理は、彼がピアニストとしても脚光を浴びていたことを思い出させます。しかし、旅稼業のピアニスト(クレメンティ)との結婚を、婚約者の父親が許さなかったため、彼は演奏家としてのキャリアを断念し、その後、ピアノ製造及びピアノ音楽に関わる出版業者となりました。

次のソナチネは1世紀後のものです。この時代の作曲家たちは、過去のレパートリーを創造的に創りなおす”ムジカ・アル・クワドラータ”と呼ばれる編曲を熱心に行っていました。偉大なピアニストであると同時に傑出した作曲家でもあるフェルッチョ・ブゾーニ(1866-1924)は、フィレンツェで生まれ、後にベルリンに活躍の場を移しました。ソナチネ”カルメン幻想曲”は、すばらしい知性の結晶です。有名なビゼーのオペラ『カルメン』をテーマに、華やかな装飾が繰り広げられ、その並はずれて優れた作曲技法により、まるで映画のシーンが入れ替わるかのように非常にすばやく明快に場面が転換していきます。場面は発展することなく突然中断され、また別の場面へと目まぐるしくとってかわっていく一種の暴力性には、どこかシニカルな印象さえあります。しかし最終部分では誠実な哀感をもって、静かに曲は閉じられます。

オットリーノ・レスピーギ(1879-1936)は父マルティーニ・レスピーギと同じくボローニャの出身です。ブゾーニと同年に書かれた”グレゴリオ聖歌による3つの前奏曲”は、ローマカトリックの礼拝式の音楽的伝統(旋法・旋律・ハーモニーや雰囲気)に則って展開され、その厳格な表現に心を打たれます。ピアノという楽器が時代の変遷の中で流行に流されてしまうことなく、また美学的論争や検閲に屈することなく、表現の自由さを保持してきたことは疑う余地がありません。そのためレスピーギは、世間が古典的伝統的な音楽に反発し、時には極端に感情的にそれらを否定し、締め出そうとした時代にあっても、確固として首尾一貫した態度を貫き通したのです。

王子フランチェスコ・ダヴァロス(1930- 作曲家カルロ・ジェズアルドの不幸な妻マリア・ダヴァロスの末裔)は、今日もナポリの中心にある15世紀に建てられた古い宮殿に住んでいます。彼はアヴァンギャルド様式の音楽(2つのグランド・オペラ、室内楽、交響曲)を書いています。同時に19世紀に流行していたヨーロッパの様式によるピアノ独奏曲を多く残しました。まるで、ボルヘスの小説の主人公ピエール・メナールのようじゃありませんか?(訳注:ホルヘ・ルイス・ボルヘスの『『ドン・キホーテ』の著者ピエール・メナール』は、比較論文の形をとったドン・キホーテのパロディ小説。20世紀の作家メナールは17世紀のセルバンテスになりきり、一字一句違わない『ドン・キホーテ』の再現を試みるという設定で、作品中にはセルバンテスの『ドン・キホーテ』も全て引用されている。)自叙伝の中で彼はこのような試みを行った理由を説明しています。今日は、いかにもロベルト・シューマンが書いたであろうと思わせるような短い曲”アルバムの一葉”をご紹介します。

カゼルラ(1883-1947)は19世紀のパリから吹いてくる近代化の風を表現しました。彼の”トッカータ”は若い頃の作品ですが、その後まもなく流行するグロテスクな表現、当時すでに流行しつつあった、工場のモーターさながらの際限のない16分音符の連続などを乱用したりはしませんでした。和声の調和、のびやかなメロディーをバランスよく保つことが、彼の求める音楽の様式だといえます。

プログラム中で最も新しい曲は、数年前に流行したシチリアのシンガーソングライター、フランコ・バッティアート(1945-)の歌をピアノ用に編曲したものです。彼は中東、アヴァンギャルド、古代の音楽の要素なども取り入れる非常に実験的な音楽家で、現代音楽家として特別な地位を得ています。”ラ・クーラ”(人や物を思いやる事:「守ってあげたい」)は年老いた哲学者マンリオ・ズガランブロの詩を用いています。しかしたとえ彼の美しい言葉なかったとしても、バッティアートの音楽は十分に私たちの心に訴えかけてくるでしょう。

(訳・福崎芳枝、梅田紅子、木下淳)